

出田 めぐみ、鼓 太志（編）

高齢者施設のリハビリテーション 第2版

田 中 歩

（介護老人保健施設ヴァンサンク、作業療法士）



その人らしい生活には、安心して暮らせる環境が不可欠であり、環境は生活の土台となります。環境の中でも、支える人（その人にかかわるすべての人）の存在は大きいと感じています。「どこで暮らすか」も大切ですが、「誰と」、「どのように」は、その人らしい生活やQOLの向上に欠かせないポイントです。『高齢者施設のリハビリテーション 第2版』は、生活を支えるすべての職種の方に向けて、実践的、かつ包括的に最新の知見をまとめた一冊です。

本書は、施設の入所者が主体的に行動し、生活を構築するための手引書です。「生活リハビリ」という言葉がありますが、リハビリテーションは、リハビリテーションの時間だけ頑張るのではなく、日ごろの活動において、いかに主体的に行動する機会を増やすかが重要であると思います。一人暮らしの生活は、自分で家事動作を行う機会が多く、必然的に活動量が増え、体力も向上して、ますます活動する機会が増えるよい循環となりやすい生活です。施設での生活はどうでしょうか。支援する人のかかわり方次第で、その人が元気になるかどうか変わってきます。本書でも、多職種協働の重要

性が強調されており、入所者一人ひとりの「その人らしさ」に寄り添うチームアプローチのあり方を再認識できます。

また、入所者の理解や支援のポイント等がわかりやすく紹介されており、分類や行動パターン等が体系的に整理されています。具体例や事例のエピソードは、読んでいだけで、にやけたり、ほっこりしたり、共感することがたくさんあり、どれもイメージしやすく、身近に感じました。作業療法士には「その人らしさ」を引き出すアセスメントスキルと、対象者自身や周囲の人を巻き込むコミュニケーションスキルが大切だと考えています。本書は、そのどちらにも活用でき、多職種とコミュニケーションを図る際に役立つ内容が詰まっています。

もう一つ、印象に残ったことは、「よそ行きの顔を見せる場」という言葉です。人は、人や環境に合わせて、いろんな顔を使い分けて生きています。いい顔をしたたり、格好をつけたり、甘えたり。変わらない日常も大切ですが、適度な刺激は、意欲を引き出し、生活に張り合いをもたせます。その人が大切にしている活動や役割を見つけ、主体的な行動を引き出す

ことで、普段とは違う一面の発見、生きがい、居場所づくりにつながります。そのときだけでなく、継続した場の提供が必要になります。これもまた、多職種と連携した支援が欠かせません。

高齢者施設は、地域の高齢者が「その人らしく生活する」ために必要な社会資源の一つで、地域包括ケア・地域共生社会の実現において重要な役割を担っており、施設の役割はますます広がっています。

高齢者が元気に暮らすことが、子ども世代が安心して働ける環境につながり、孫世代が輝く社会につながります。病院も地域の社会資源の一つです。対象者は、自宅や高齢者施設から病院に行き、戻ってきます。どこで、誰と、どのように暮らすのか、その人らしい生活を支えるという視点は病院であっても同じです。

多様化・複雑化する社会において、本書が多くの方の指針となり、かかわるすべての人が元気で暮らす社会につながることを願っています。

B5判 196頁 3,000円＋税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357